

現代哲学・現代思想と過去の思想界における差別論

はじめに

2021年3月現在、「差別」という言葉を絶対化し批判できない空気があります。

これは過去にもあった問題です。

ソビエト連邦があった時代には日本の言論界は共産主義・社会主義者とそれ以外しかありませんでした。

それ以外には様々なものが含まれますが、自由主義、市場経済、資本主義、民主主義の肯定派などが含まれ、それらは共産主義系の人々からは右翼、保守反動などと言われ攻撃されてきました。

当時はマルクス主義が隆盛してそれを絶対化する強い空気がありましたのでそれを批判する人は総じて「右翼」でひっくるめられていたような状況がありました。

55年体制と言われた政治体制では、共産党や社会主義政党がある一方自由民主党などは「共産党以外」が混在した政党でした。

論壇は岩波の「世界」のような共産主義者の雑誌がある一方、産経新聞の「正論」や文春の「諸君」などがあり後者2つはアンチ共産主義の自由主義的な民主主義や市場経済、資本主義を肯定する立場が強くはありましたが特に結束力がなくあまりまとまりがない状況でした。

ソ連崩壊後、多くの共産主義者、社会主義者が多くの方がアノミー状態に陥りました。

別にソ連が崩壊しても自分の主義を替える必要はなかったのですが、ソ連を筆頭とした東側諸国の存在がその人々の主義と精神を支えていたものと推察できます。

それらの時代にも現在のポリティカルコレクトの差別と社会改造の主張があったのですが、それに対応する左派系統ではない人々からの分析や批判がありある程度「差別」の絶対化は防がれていました。

現代ではその時以来久しぶりに「差別」の絶対化とそれに反論できない空気が醸成されて

いるようです。

現在は過去の論壇と言われるものはほとんどなくなってしまったようですが過去の保守的論壇人と言われた会田雄二、山本七平、山本夏彦、渡部昇一、谷沢栄一、小林よしのり氏などの分析や現代哲学や思想の方法論を用いて差別の分析や相対化を行いたいと思います。

第一章 現在の差別の状況

差別に限ったことではないですが現在の日本の言論の状況は過去の論壇のようなものではありません。

例えば過去はそれがオピニオン雑誌というものが担っており、その雑誌を読むことで一般の人々でも言論界の流れを見て共有しつつ自分でも理解し共有することができました。

1990年代以降、東側諸国の崩壊と左翼のアノミー化と潜在化による対立軸の崩壊、テレビや雑誌などの大手メディアの衰退とインターネットの普及などでそういった場がなくなっているようです。

それと共に過去に左翼であった人、左翼的心情を持つ人々がポリコレという旗印により復活しているようです。

ポリコレの理論的支柱と思われるものに「差別」は「悪」である、「差別を解消せよ」というものがあります。

現代の世界ではこれに反論する言説がないようです。

では「差別」の分析を行ってみましょう。

第2章 差別とは何か

差別を考える場合、やはり大切なのは差別と言う言葉の意味になります。

「差別と区別は違う」と言うような言い方がよくなされます。

何が違うのかはあまり共通見解がないようです。

現代哲学の構造主義を用いて言葉の意味を考えてみましょう。

まず「差別」も「区別」も差異を認めて物事を2つに分けているようです。

「区別」についてはこれで終わりで良いでしょう。

つまり「差別」も「区別」も「区別」を行っている点について一致しています。

「区別」は「差別」の必要条件です。

区別までなら区別されたものへの価値判断はしていません。

「差別」の特徴は「区別」した上で区別されたものを善悪の価値判断を行っていることです。

この価値判断には色々なものが混じっているようです。

まず正義と悪で分ける善悪の判断、強者と弱者で分ける判断、加害者と被害者で分ける判断です。

善悪や正義と悪については日本語ではより詳細に分けるべきものが混同することが多いようです。

これは日本語の「よい」「わるい」の言葉がある面から見ると多義的であることから生じます。

「よい」「わるい」は倫理的、道徳的意味で使われることがあります。

また「よい」「わるい」は法律を守っている、守っていないの意味で使われることもあります。

また上手い、下手の意味で使われることがあります。

また正しい、間違っているの意味で使われることがあります。

また美しいや素晴らしい、美しくないや素晴らしいの意味で使われることがあります。

つまり優れているものがよい、劣っているものが悪いという優劣の使い方です。

他にもあると思われませんがこれだけでも、正義と悪、遵法と違法、真・善・美の5通りの意味で使われます。

正義とは本来正しい判断と言う意味です。

この場合正しいと正しくないの判断基準がありその正しい方の判断をしたということです。

これだけ見ると正義には「倫理・道徳的な善」とは必ずしも一致しません。

どんな基準にせよ正しいとされる判断をしたという意味ですが、そもそも基準自体がそれに従えば倫理・道徳的な善に合うかどうかということは考慮されていません。

ですから正義の反対は不正であって悪ではありませんが、正義と善を同一した場合には不正と悪が同じものになります。

法律的な遵法と脱法ですが、法律が必ずしも倫理・道徳的に作られているとは限らないため遵法が善とは限りません。

また「いじめられる側にも悪い所がある」という言説があります。

これはいじめられる側は上手にいじめられないために上手にふるまっていなかったという意味であっても、いじめられる側が悪であったり、素晴らしいという意味ではないですが、これも「いい」「わるい」という言葉をよく考えられずに使うと勘違いされることおがあります。

価値判断でいうと日本では神道も仏教もあまりはっきりした価値判断を行いません。

仏教の核心は空論と中観論でそもそも世俗的なイデオロギーではないので生活における行動規範を扱う道徳とは直接関係がありません。

神道は清明、清く明けき心を重視し、清潔であることを貴びますが、それ以外は多様性の中の共通の教義と言えるものを定めるのが困難です。

日本には上記のようによい・わるい、正義、善悪、優劣と言ったものが混乱する下地があります。

混乱だけなら整理すればいいのですがもっと複雑なことによい・わるい、正義、善悪、優劣の定義は往々に恣意的に行われます。

その他に過去の論壇を振り返ってみます。

1970年代から2000年代を代表する非左翼論壇人に山本七平氏と小林よしのり氏がいます。

この2名の「正義」に関する考察を考えてみます。

両者の分析によると左翼の特徴は「絶対的な正義や悪がある」とすること、「弱者であり被害者であることは正義である」という論法を使うという点が挙げられるとしています。

ここでは正義の一種に弱者であることや被害者であることがあるとしている点が注目です。

ただでさえ混乱した正義の概念に新たな意味を付け加えています。

確かに「弱きを助け、強きをくじく」と言う考え方が日本にはある時期ありました。

また人間関係において理由もなく他者に害を加えられられ被害を被れば加害者は責められ、謝り償うべき義務があり、被害者は気の毒なもので同情され謝られ償いを受ける権利があると考えた自然な人情があります。

謝るという言葉は時に謝罪と言い換えられます。

罪とは法律、あるいは倫理・道徳の言葉で、謝るという概念に法や倫理・道徳が混入してくる可能性があります。

また気の毒、同情すべき、可哀そうなどと思われる人は特別扱いされるべきであるという考え方もあります。

被害を受けなくても弱者は助けるべきであるという考え方もあります。

正義やよい・わるいなどの考え方はただでさえ混同され混乱しているわけですが更にこれに利権や経済的な要素を絡めてくる人がいます。

謝るや償うは謝罪や賠償に簡単に言い換えてしまう人がいますが、弱きものは守られるべきである、そして弱くないものに高められるべきである、あるいは強いものを弱いものと同等水準にすべきであるという考え方が絡まされることがあります。

さらに平等という概念が持ち込まれる場合があります。

平等でなければ誰かが良い立場にいたり得をしたりしている、あるいは誰かが悪い立場にいたり損をしたりしているような考え方です。

区別と差別の違いは区別は唯分けるだけですが、差別は分けた後により・わるいの区別を更につけるか、初めから優劣を決めてそれに基づいて区別することにあります。

そして最大の問題点はよい・わるいは混乱しているうえに恣意的なのです。

第3章 弱者振りと被害者振りの問題

「差別」は政治利用可能です。

これは意識的にも無意識的にも行われていますし、行われてきました。

また善意を持って行われる場合も、悪意を持って行われる場合もあります。

悪意とこの場合は負の感情を持って誰かを貶める、害を与えるために行うとしましょう。

「悪意を持って他者に害をなす」ということは他者に対する攻撃と見ることができます。

「悪意を持って害をなされる」人にとってはこれを行う者は敵とみなすことができます。

これは本来差別とは異なることですが、故意に攻撃や敵という概念を平等と絡めることを行う人がいます。

また精神の機能を知情意に分けると知でなく情意を刺激し興奮させ冷静でなくして知的機能を抑制させてしまうことがあります。

そもそも自己防衛上「害をなさなくても悪意を持たれている」だけでも敵とみなしてもいい場合もあるでしょうし、「悪意がなくても害をなしてくる」だけでも敵とみなしてもいい場合もあるでしょう。

「差別」の安易な使用は予想外の事態を起こすことも考えられます。

同じく「平等」「よい・わるい」「優劣」の政治利用も難しい問題をはらんでいます。

そもそも「差別」「平等」「よい」「わるい」「優劣」の全てが恣意的で意味に合意が得られた概念ではないでしょう。

また時代の変化も考える必要があります。

世の中は二項的でなくもっと多くの区分を付けることができるとするとある物事を区別するためには類（カテゴリー）を決める必要がありますし、差別するためには各類のよい、わるいの順序を決める必要があります。

昔は集団主義が強い他優劣観念も強く上記の差別の構造を当てはめて違和感のない現実のモデルがありましたが、今は個人主義が強くなり物事を優劣のような単純な 2 項思考で見なくなったので上記のモデルが当てはまらなくなっています。

個人主義では人間をその所属するグループではなくその人間自体を人物本位で見ます。

また価値判断がよい・わるいや優劣のように単純な順序で分けられません。

よいことにはその本質に基づいた悪い面があるし、悪いと思われることにも必然的にそれに付随するいい面があると考えたりします。

またトレードオフや機会費用で考えて何かに対してある判断を行うことは別の判断をす

る可能性を失うリスクがあると考え、つまり経済学的かつ統計学的に考えることもあります。

類が定められるのは集合が定められる方で、一人一人がバラバラに主体性を持って生きている社会では個人がある集団に分類されることに納得しない場合も出てきます。

個人主義ではマジョリティーとかマイノリティーとか分けても行き着くところは集団、集合ではなく主体性を持った個人がバラバラに生きているのが現代です。

おわりに

現代の差別の問題として挙げられるのはかつて差別されておりマイノリティーであるとみなされていた存在の差別の解消を超えた逆差別、他の社会グループに対して悪意を持つ、あるいは攻撃する、あるいはその両方が生じている事でしょう。

差別を解消すると言いながらその方法としてやはり従来型の差別の考え方をを使うと差別関係が逆転するだけで差別自体の解消にはなりません。

そもそも差別と平等は論理的にはまず独立に考えるべきですが現在は妙な形の連合を形成していて時と場合によってご都合主義の様に形を変えます。

平等も扱いを慎重にしないとすぐ差別を生じるので慎重に考えるべきものです。

経済的格差があるから平等ではないという人は価値判断を金銭で行うという差別をしているという逆説が生じたりします。

もはやマジョリティーがあるマイノリティーに対して感情的にも態度、待遇、処遇的にも差別を行っていないのに自らをマイノリティーと名乗りマジョリティーを悪意を持って攻撃する場合にはそのマイノリティーはマジョリティーにとっては差別対象ではなく敵になります。

「差別はしていないが敵である」という状態が生じてしまいます。

この様な論考は先人が既に行い通念にもなっていたのですが、今では忘れてしまった人が多いか知らない世代が増えてきたと思われるのでここでまとめました。(字数:5,296字)